

Title	メルロ=ポンティの行為理論：行為の構造分析に向けて
Sub Title	The theory of action in maurice merleau-ponty : for analyzing structure of action
Author	清水, 淳志(Shimizu, Atsushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2012
Jtitle	哲學 No.128 (2012. 3) ,p.51- 86
JaLC DOI	
Abstract	The aim of this paper is to search for the concept of action in Maurice Merleau-Ponty (in The Structure of Behavior) At first, I take a general look at his concept of behavior. Merleau-Ponty tries to grasp it as a structure. Then, in the second section, the concept of action is sought for in his discussion by using a clue as his concept of consciousness. He divides it in two: one is a lived consciousness,the other is a reflexive consciousness. In correspondence with each of these,two types of action can be found out in Merleau-Ponty. In the third section, the relationship between behavior and action is examined on the basis of his concept of structure. In addition, I question how the two kinds of consciousness is related with each other. In the next two sections, I consider about what Merleau-Ponty takes up in his analysis of action. In the fourth section, the structure of action is focused on.Concretely, it is the structure of actor's consciousness. In the fifth section, the meaning of action is made into investigation. Merleau-Ponty regards it as not only meaning of actor's consciousness but also meaning of action itself. Lastly, in the sixth section, I summarize this paper and indicate my next task.
Notes	特集：社会学 社会心理学 文化人類学 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000128-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese

Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投 稿 論 文 —

メルロ＝ポンティの行為理論

——行為の構造分析に向けて——

— 清 水 淳 志* —

**The Theory of Action in Maurice Merleau-Ponty:
For Analyzing Structure of Action***Atsushi Shimizu*

The aim of this paper is to search for the concept of action in Maurice Merleau-Ponty (in *The Structure of Behavior*). At first, I take a general look at his concept of behavior. Merleau-Ponty tries to grasp it as a structure. Then, in the second section, the concept of action is sought for in his discussion by using a clue as his concept of consciousness. He divides it in two: one is a lived consciousness, the other is a reflexive consciousness. In correspondence with each of these, two types of action can be found out in Merleau-Ponty. In the third section, the relationship between behavior and action is examined on the basis of his concept of structure. In addition, I question how the two kinds of consciousness is related with each other. In the next two sections, I consider about what Merleau-Ponty takes up in his analysis of action. In the fourth section, the structure of action is focused on. Concretely, it is the structure of actor's consciousness. In the fifth section, the meaning of action is made into investigation. Merleau-Ponty regards it as not only meaning of actor's consciousness but also meaning of action itself. Lastly, in the sixth section, I summarize this paper and indicate my next task.

* 社会学研究科単位取得退学

0. はじめに

行為という概念は、元来、社会理論のなかで主要な考察対象の1つとなってきただけでなく、社会理論が思考のヒントを求めて哲学の領域へと越境を試みる時、両者をつなぐかけはしにもなってきた⁽¹⁾。本稿では、その一例としてフランスの哲学者モーリス・メルロ＝ポンティの行為概念を取り上げ、検討してみたい。具体的に言えば、『行動の構造』のなかに社会理論で言う行為にあたるものを探し出していこうと考えている。ただ、ここですぐに、以下のような疑問の声があがるかもしれない。メルロ＝ポンティは、『行動の構造』で有機体の動作・反応としての行動を考察したのであって、社会理論で言う「主観的意味を持った行為」(ウェーバー)は考察の対象外ではないのか。また、仮に行為にあたるものが見い出せたとしても、行動と行為の区別を強調することは、経験主義／主知主義の二項対立を乗り越えるというメルロ＝ポンティの意図を裏切ることになってしまうのではないか。

確かに、『行動の構造』にあつて有機体の行動に考察のウェイトが置かれているのは間違いない。また、概念使用について言えば、多くの箇所ですべて「行動 (comportement)」と「行為 (action, acte)」が互換的に使用されていることは否めない⁽²⁾。さらに、主観的意識を指標として行動と行為を区別するといった単純な作業のみがなされるならば、上記の懸念はまさに現実のものとなると言える。しかしながら、詳しくは第2節で見るが、メルロ＝ポンティが『行動の構造』のなかで、社会理論で言うところの—行動とは異なるものとしての—行為を捉えているのもまた事実である。また、—これは第3節で見ていくが—メルロ＝ポンティが構造という概念に付与している特質を押さえることで、筆者としては、先に述べた行動／行為＝経験主義／主知主義という図式は回避できると考えている。

以下、本論文の概要を示しておこう。まず第1節では、メルロ＝ポン

ティの行動概念を概観する。次いで第2節では、メルロ＝ポンティの意識概念を手がかりにして社会理論で言う行為にあたるものを探し出していく。メルロ＝ポンティにとって意識とは、反省的意識であると同時に生きられた意識でもあり、行為のあり方もこの2つの意識各々に対して提示されることになる。第3節では、メルロ＝ポンティの心身関係論を導きの糸として、行動と行為の関係、および前節で見た2つの意識の関係を考えていく。第4節と第5節では、メルロ＝ポンティが分析対象と見なす行為の構造と行為の意味について取り上げる。まず第4節で、行為の構造としての意識が、いかなるものであるかを検討する。次いで第5節では、メルロ＝ポンティが考える行為の意味とその把握の仕方を見ていく。最後に第6節で、以上の議論のまとめと今後の課題を示して本稿を閉じたいと思う。

1. 構造としての行動

まず本節では、メルロ＝ポンティの行動概念を概観する。メルロ＝ポンティは『行動の構造』の序論で行動主義者ワトソンにふれ、その行動概念が「反射と条件反射の総和」(SC3=23)に還元されていると指摘する。社会理論でもしばしば言及されるように、行動主義にあって行動は—反射であれ、条件反射であれ—刺激-反応図式で説明されることになる。メルロ＝ポンティ自身の行動概念は、反射と条件反射各々においてこの刺激-反応図式の再検討を通じて提示されていると言える。

1.1 反射行動

メルロ＝ポンティは、反射行動を理解するにあたって刺激-反応図式にいかなる問題を見出しているのだろうか。メルロ＝ポンティが問題視するのは、この図式が「一定の反応に対して十全な刺激、特定の受容器、不変な反射弓」(SC30=57 傍点は引用者)の存在を想定していることである。

メルロ＝ポンティによれば、このような1:1の対応関係を認めることはできないという。例えば、刺激を有機体とは無関係に物理的世界のなかにそれ自体として存在するものと考えるべきではない。刺激とは、有機体の特質に応じて物理的世界のなかから選び取られたものとして存在する(SC 11-12=33)。また、その刺激を受け取る受容器は、引き起こされる反射行動との対応関係からその領域を解剖学的に限定することはできない。例えば、同じ1個の受容器によって異なる反射が引き起こされうるし、別々の2箇所の興奮でも同一の反射が生じ得ることが観察されている(SC 14=37)。さらに、受容器の興奮から反応にいたる際に、特定の反射回路を指定することも不可能である。なぜなら、反射行動はそれを遂行する筋肉の位置に応じて変化することが分かっており、もし筋肉の位置の数だけの反射回路を設定するとその数は際限のないものになってしまうからである(SC21=46)。以上のことから、ある刺激が外在的に特定の受容器に作用して興奮が生じ、その興奮が特定の反射回路を経由して1つの反応をもたらすといった仮説は支持し得ないことが分かる。反射行動にあって問われるべきは、刺激それ自体の特質ではないし、神経系の特定の解剖学的部位でもない。メルロ＝ポンティが真に問題とするのは、有機体との関係のなかで生じる「刺激の布置」(SC31=58)であり、その布置が神経系全体⁽³⁾にわたって引き起こす作用(SC21=46)なのである。

しかしながら、解剖学的説明が有効でないとすれば、有機体がある刺激に対して通常比較的安定した一定の反応を示すことをどのように理解すべきだろうか。例えば、眼球は通常日光に照らされた状態では光を避けようとするし、反対に暗闇では光を求めようとする(SC36=65)。このような反射行動の恒常性を説明するためにメルロ＝ポンティが持ち出すのが、機能という観点⁽⁴⁾である(SC38=67)。具体的に言えば、眼球は、物を見るという機能を果たすために光の量や方向に関して「特権的平衡状態」(SC 36=65)を維持しなければならない。眼球が周囲が明るい時には光を避け、

暗ければ光を求めるのはこの平衡状態を回復しようとするためなのである。ただ、このような眼球の反射行動にあつて、光を受容する部分と平衡の回復のために運動する部分とは、予め独立した2つの装置として各々機能すると考えるべきではない(SC36=65)。それでは、解剖学的説明に戻ってしまう。この2つは、光を受容することで平衡状態に変化が生じ、それを回復するために運動が起こり、さらにその運動によって光の受容が変わる、といった循環関係にあるのであり(SC48-49=80-81)、それゆえ「感覚-運動系」(SC36=65)という1つの系として機能している。平衡状態は、この感覚-運動系全体において生じ維持されることになり、その意味でそれは、孤立した諸部分の総和とは異なる全体的過程として理解されるゲシュタルト(formes)だと言える(SC49-59=81)。メルロ＝ポンティによれば、この平衡状態こそが、反射行動のあり方を規定する「分解不能な構造」(SC48=79)なのである⁽⁵⁾。

1.2 学習行動

『行動の構造』の第2章では、条件反射学説が検討の対象とされる⁽⁶⁾。メルロ＝ポンティによれば、動物の反射生起圏の拡大を説明しようとしたこの学説の核心は、学習行動の究明にある(SC103=147)。条件反射学説は、動物の学習を「試行と錯誤」の原理で説明する(SC103=147)。つまり、この学説によれば、学習過程とは、目標に対する動物の一連の試行にあつて、失敗したものが排除され、成功したものが固定化される過程なのである(SC103=148)。しかし、学習とは、成功した動作がそのまま固定化されることではない。例えば、ヒモに跳びかかればエサが得られるよう訓練されたネコは、成功した試行ではヒモを脚で引くが、2回目は歯で引くことになるという(SC106=151)。メルロ＝ポンティの考えでは、条件反射学説の根本的欠陥は、それが状況と反応の間に「物理的出来事の客体的継起」(SC109=155 傍点引用者)しか見ていないことにある。これに

対して、メルロ＝ポンティは自身が考える学習について以下のように述べる。

「それゆえ、感覚神経終末に受容された興奮や効果筋によって遂行される運動は、それぞれの構造のなかに統合されており、その構造がそれらに対して調整の役を演じていることになる。この構造の過程が、上で定式化した学習の諸法則を説明してくれる。つまり、その過程は、状況と反応のあいだに意味の関係を設定するものである以上、それこそが適応した反応の固定と習得された傾性の一般性を説明するわけである。それは、刺激 - 反応の図式のなかに、刺激の質料的特性ではなくて、状況の形式的特性、すなわちその骨組となる空間的・時間的・数的・機能的諸関係を介入させるからである。そういった種類の関係が出現し、関係そのものが効力をもつようになる限りにおいて、行動の進歩ということも説明できるのである。」
(SC112-113=159-160)

メルロ＝ポンティによれば、学習とは「状況と反応のあいだに意味の関係を設定する」ことなのである。これによって、状況と反応の間の即自的継起は、有機体にとっての継起へと変化する (SC111=157)。ただ、ここで注意すべきは、メルロ＝ポンティが指摘する学習の「一般的性格」(SC107=152) である。具体的に言えば、彼の学習概念にあって問われているのは、状況の個別的内容ではなく「状況の形式的特性」なのだとと言える。例えば、「習慣の転移」(SC107=152) といった現象が示すように、異なる状況であってもそこに「同じ形式」(SC106=151) が見い出されるならば、同じ反応がなされうることになる。また、反応（動作）についても同じことが言える。問われるべきは、個別具体的な動作ではない。メルロ＝ポンティにあって重要なのは、「習得された傾性の一般性」であり、

実際の動作は「同一の基本的命題をめぐって多様な現われ方をしうる一般の特性の特殊な一例」(SC108=154-155)にすぎないとされる⁽⁷⁾。

以上、メルロ＝ポンティにあって学習とは「状況と反応の間に意味の関係を設定する」ことであり、この関係こそが学習を規定する行動の構造なのである。メルロ＝ポンティは、その構造のあり方に応じて学習行動を以下の3つに分類する。具体的に言えば、行動の構造が、状況の個別的内容のなかに埋没しているか、それから分離して活動の固有の主題にまでなっているかに応じて行動は分類されることになる(SC113=161)。

①癒合的形態

これは、動物の行動が自然的条件のなかに閉じ込められている状態を指す。この水準での行動は、本能行動に限定され学習は不可能である。例えば、振動する黒い紙をエサと誤認しとびついたガマは、その経験から制止反応を引き起こすが、その反応は数分しか保持されえない(SC115=162)。

②可換的形態

学習は、本能に組み込まれていない信号(条件刺激)に対する行動が可能になる段階で生じる。メルロ＝ポンティは、その一例としてケーラーのニワトリの実験を取り上げている。まず、エサとなる穀物を2つに分け、一方に薄い灰色の標識($G \cdot 1$)を、他方に中くらいの灰色の標識($G \cdot 2$)を取り付ける。そして、ニワトリに $G \cdot 1$ をとり、 $G \cdot 2$ をとらないようにしつける。その後、 $G \cdot 2$ をやめ、 $G \cdot 1$ よりも薄い灰色の標識($G \cdot 0$)を設置する。ニワトリに $G \cdot 1$ と $G \cdot 0$ のあいだで選ばせると多くの場合、 $G \cdot 0$ をとる。次に、 $G \cdot 2$ とそれよりも濃い灰色の標識を設置し、ニワトリに選ばせると今度は $G \cdot 2$ が選ばれる。この実験結果から、ニワトリは特定の灰色を選択しているのではなく、常に2つの灰色のうち薄いほうを選択していることが分かる。この実験にあって、ニワトリの行動を規定する構造とは、2つの標識間の関係に対する関係のことなのである

(SC116=163-164).

以上のような信号（条件刺激）に対する反応は、より進んだ段階では、対目標反応というよりも、人間の言葉で言うところの目的-手段図式に近いものになる (SC119-120=168). 具体的に言えば、サルが道具を使って目標物を取ることがその一例である (SC123=172). しかし、メルロ＝ポンティは、サルにとって可能なことではなく、不可能なことに注目する。例えば、箱を台として使用することを習得したサルであっても、その箱に他のサルが座っていると、そのサルは箱を台として使用できない (SC124=173). サルは、箱を椅子であると同時に台として認識することができないのである。

③象徴的形態

これに対して、人間は同一の物に対して複数のパースペクティブを取り、それらを交互に交換させることができる。1つの箱を台とみなすことと椅子とみなすこと、この2つは「交互表出の関係」(SC128=178)にあり、人間は箱を台として扱うときでも、それを椅子とみなす可能性を潜在的にであれ保持している。メルロ＝ポンティによれば、この関係性こそが、人間独自の行動を規定する構造なのであり、これは「〈物〉としての構造」(SC129=180)と呼ばれる。物が特定のパースペクティブから見られる時でも、別の角度から見られる可能性に常に開かれているように、人間行動の構造も常に別の可能性を含み持つことになる。そして、行動がこの段階に至ると、刺激は種によって決定される機能値から解放される (SC133=184). 先の例で言えば、箱についての視覚刺激は、受容者にとって椅子を意味するものとして「固有な主題」(SC131=182)となるのである。

2. 意識と行為

前節では、メルロ＝ポンティの行動概念を概観した。では、社会理論で

言うところの「行動」とは異なるものとしての「行為」は、メルロ＝ポンティにどのようなかたちで見い出すことができるだろうか。社会理論にあつて行動と行為を区別する指標は、後者が主観的意識を持つことに求められてきたと言える。そのため、本節でも以下これにならないメルロ＝ポンティの意識概念を手がかりにして、彼の議論のなかに行為にあたるものを探し出していきたい。

2.1 生きられた意識

『行動の構造』にあつて意識の問題は、第3章第3節「人間的秩序」で取り上げられることになる。人間的秩序とは、物質的秩序、生命的秩序に次ぐ第3の秩序であり、労働によって人間固有の環境が作り出される段階だとされる(SC175=241)。メルロ＝ポンティは、この節でベルクソン批判を契機として自身の意識、および行為の概念を論じていく。メルロ＝ポンティによれば、ベルクソンの行為概念は「生命活動、有機体が自らの存在を維持するための活動」(SC176=242)と同義であり、時としてそれは、純粋な身体運動に逆戻りするという(SC176=243)。例えば、ベルクソンにあつて能動的行為は、思考の運動的付随物とみなされることになる(SC176=243)。こうした行為概念が登場する背景としてメルロ＝ポンティは、哲学が意識と行為の内的連関を把握し損なっていることを指摘する(SC177=244)。そして、彼がここでとりわけ問題視するのは、意識を表象の所有や判断の発祥地としてのみ見なす主知主義的な意識概念である。例えば、意識を表象の所有と定義すると「行為の意識は、一方では必然的に目標の表象に還元され、他方では、場合によって、それを実行に移してくれる身体的自動運動の表象に還元される」(SC188=258)ことになる。この場合、前者を目的、後者を手段とすれば、両者は、各々が独立に定義されるという意味で外的な関係をとる(SC188=258)。自らの行為に対する知的分析を、有機体の維持という目的のための手段としてのみ見な

すベルクソンの行為概念はその一例なのである (SC187-188=258).

これに対してメルロ＝ポンティは、生きられた意識を対置する。彼によれば、意識とは「時には意識自身に明晰な、また時には認識されるものではなく却って生きられるだけのものであるような意味的志向の束なのである」(SC258)。メルロ＝ポンティは、意識の生きられた側面を以下のような事例を使って説明している。

「フットボールのグラウンドは、走りまわっている競技者にとっては、『対象』ではない、つまり無限に多様なパースペクティブをひきおこしながら、パースペクティブが変わっても等価のままでいられるような理念的目標ではない。そのグラウンドはさまざまな力線(『タッチライン』や『ペナルティ・エリア』を限る線)によって辿られ、またある種の行為を促す諸区画(たとえば敵同士の間『間隙』)に分節されて、競技者の知らぬ間に、彼の行為を発動し、支えるのである。グラウンドは、彼に与えられているのではなく、彼の実践的志向の内在的目標として現前しているのである。競技者はグラウンドと一体となり、たとえば、『目標』の方向を、自分自身の身体の垂直や水平と同じくらい直接に感ずる。意識がこの環境にすみつくのだ、と言うだけでは不十分であろう。意識とは、この瞬間、環境と行為との弁証法以外の何ものでもないのである。競技者の試みる駆け引きが、そのつどグラウンドの様相を変え、そこに新しい力線を引き、そして今度は行為が、ふたたび現象野を変容させながら、そこに繰りひろげられ、実現されるわけなのである。」(SC182-183=250)

メルロ＝ポンティの考えでは、競技者とグラウンド、より一般化して言えば、行為者と「対象」は、「実践的志向」(SC188=258)によって結び付

けられている。この実践的志向によって人間の行為は成り立つのであるが、その際、目的と手段を「別々の要素として区別することは不可能」(SC188=258)となる⁽⁸⁾。さらに、人間は「対象」とのあいだに多様な実践的志向を取り結ぶことができ、そのためそこで成り立つ行為は、単に生命を維持するためだけでなく、それ以外の多様な要素を含んだ固有の環境を作り出していくことができる。メルロ＝ポンティ自身は、以下のように述べている。

「行為の目的と手段の分析にとって代わるのは、行為の内在的意味と、その内的構造の分析である。この新しい観点からすれば、仮にすべての行為が生への適応可能ならしめるとしても、〈生〉という言葉が、動物と人類とでは意味を異にし、また生の諸条件も、その〈種〉の固有の本質によって定義されるものだという事に気づくであろう。もちろん衣服や家は、われわれを寒さから護る働きをし、また言語も集団労働を助け、『無機物的固体』の分析を助けるものである。けれども衣服を着るという行為は、装飾の行為や、さらに羞恥の行為となり、かくして自己自身や他人に対する新しい態度を開示する。自分たちを裸であると思うのは、人間だけなのである。人間はまた、自分たちの建てた家のなかに、自分たちの選んだ価値を投げ入れ、それを現実化する。最後に、話す行為も、彼が直接環境に固執するのを止めて、自らを傍観者の位置に高め、そしていわゆる認識によって心的に環境を占有していることを表す。」(SC188=258-259)

ただメルロ＝ポンティは、固有の環境を作り出せることを以って人間の定義だと考えているわけではない。また、彼は生きられた意識にだけ注目しているわけでもない。例えば、上記の引用にあって「直接環境に固執す

ることを止めて、自らを傍観者の位置に高め」⁽⁹⁾と指摘する時、メルロ＝ポンティはすでに生きられた意識とは異なるより高次の意識を想定している。

2.2 反省的意識

メルロ＝ポンティは、人間独自の段階について以下のように述べる。

「しかし、この生きられる意識が、人間の弁証法を尽くすわけではない。人間を定義しうるものは、生物学的自然の向こう側に第二の〈自然〉—経済的、社会的、文化的自然—を創造する能力なのではなくて、むしろすでに創造されてある古い構造を超出して別の構造を創造する能力である。」(SC189=260-261)

メルロ＝ポンティは、既存の秩序を捉えなおし超えていくことが可能になる段階に人間の独自性を見い出している。では、この段階においてどのような意識が考えられているのだろうか。メルロ＝ポンティ自身は、「本来の人間的意識」(SC247=261)と言うだけであまり具体的ではない。ただ、先程の箇所(SC188=258-259の最後の一文)や「人間は、…動物が無心の状態で生きている環境の抵抗や反作用の中心を、対象の地位にまで高める能力を持った存在である」(SC191=262)というシェーラーの指摘が引用されているのを考えるとき、それは反省的意識なのではないだろうか。この反省的意識によって、人間は環境を対象化して認識できると同時に、それを別の角度から見ることでもあるようになる。

「したがって人間労働の意味は、現実的環境の向こう側に、各自が多く局面から見ることのできる一つの〈物の世界〉を認め、そして無限な空間・時間を占有するということである。そして言葉とか

自殺とか革命的行為などの意味するところも、みな同じだということは、容易に証明されうるであろう。それら人間的弁証法の行為は、すべて同じ本質を開示するものである。すなわち、限られた環境に対してではなく、可能的なもの、間接的なものに対して向きを定める能力、つまりわれわれが上でゴルトシュタインとともに範疇的態度と呼んだものがそれである。したがって、人間的弁証法は、両義的である。それはまず、その弁証法によって出現し、またそれに枠をはめるところの社会的ないし文化的構造となって現れるのである。しかし他方、人間の使用物や文化物といえども、もし、それを出現させる活動が、それらを否定したり、超出したりするものだという意味をも持たないとしたら、そのようなものとして存在することもないであろう。」(SC190=261-262 傍点はメルロ＝ポンティ)

この段階にあつて行為とは、人間固有の環境を作り出し、それに適応していくだけのものではない。それは、「可能的なもの」に向けて既存の環境を否定し、超出していこうとするものと言える。

2.3 行動と行為

前節では、メルロ＝ポンティの行動概念が、反射行動と学習行動（①癒合的形態 ②可換的形態 ③象徴的形態）に区分されているのを見た。次に本節では、生きられた意識と反省的意識という2つの意識概念を手がかりに、それぞれに対応する行為類型をメルロ＝ポンティのなかに探し出す作業を行った。ただ、メルロ＝ポンティ自身が行動とは別個のものとして行為を論じているわけではない⁽¹⁰⁾。そのため、前節で見た行動の区分と本節で取り出した行為の区分が、どのような関係にあるかを考えておく必要がある。先に結論を言ってしまうと、②可換的形態に生きられた意識

が、③象徴的形態に反省的意識がそれぞれ対応することになるが、以下ではその理由も含めて見ておくことにしたい。

まず、前者から見ていこう。どうして人間の生きられた意識とそれにもなう行為が、ニワトリやサル学習行動と同じ段階に位置付けられるのであろうか。メルロ＝ポンティによれば、両者は生物学的枠組みを超え出て、自らに固有の環境を作り出せるという点で共通することになる。まず、生きられた意識の段階にあって、人間の行為が生命維持のための活動に限定されるものではなく、文化的環境を創出しそれに適応していくものでもあることは、先に見た通りである。他方、ニワトリやサル学習行動も、本能に組み込まれていない信号への反応が可能になるという点で生物学的枠組みを超え出ており、さらにそれは、状況との間に「意味の関係を設定する」ことで固有の環境を創出できるものであった。（下等動物の場合「固有の環境」を持ったとしても、①癒合的形態で見たようにそれが生物学的枠組みを出ることはない。）メルロ＝ポンティによれば、人間が意識を持ち、それが「世界への新しい『環境』の投入」であったとしても、それだけでは人間は「動物の新種にすぎない」（SC175＝241）のである。先に見たように、彼が固有の環境の創出を以って人間の定義だと思えない理由もここに求めることができる。

もちろん、だからと言って人間の行為と動物の学習行動がまったく同じになるわけではない。まず第1に、動物は意識を持たない（SC137＝190）。次に、生物学的枠組みを超えと言っても、人間と動物では当然のことながらそこに違いがある。例えば、ニワトリが標識に反応し、サルが道具を使う、確かにこれらの点で、動物の行動は本能を超えた水準にある。しかし、以上の行動の最終的な目的はエサを採ることにあり、その意味では生物学的枠組みを超え出るものではない。これに対し人間の生の条件もまた「その〈種〉の固有の本質によって定義されるもの」であることは間違いない。しかし人間の場合、種の本質のなかに文化をつくる能力と

でも呼びうるものが含まれることを忘れるべきではない。人間が服を着るのは、防寒のためだけでなく、装飾のためでもある。人間も動物も自然を超え、固有の環境を創出する、しかし、その内容は異なっておりその意味で人間は「新種」なのである。

次に、後者はどうだろうか。メルロ＝ポンティは、人間独自のあり方を述べた先の引用(SC190=261-262)の手前で、第1節で見た人間とサルとの相違を再度指摘する(SC190=261)。人間は、物を複数のパースペクティブから見るができるが、サルにはそれができない。このパースペクティブを変換する能力は、③象徴的形態で取り上げられたものであり、それが、反省的意識の箇所でも「観点を選んだり変えたりする」(SC190=261)能力として再び提示されることになる。このことから、メルロ＝ポンティにあって反省的意識とは行動の象徴的形態に位置付けられるべきものであることが分かる。前述したように人間は、この反省的意識によって既存の環境を対象化し、さらに超出しようとするが、これは「認識する行為(conduite)や自由な行為」(SC133=184)を手に入れることなのである⁽¹¹⁾。

3. 〈心〉と〈身体〉

前節では、メルロ＝ポンティの意識概念を手がかりにして、彼の議論のなかに社会理論で言うところの行為を探し出す作業を行った。しかし、これだけでは、最初に述べたように、行動／行為＝経験主義／主知主義の枠組みから一歩も出ていない。我々は、行動と行為の関係をどのように考えるべきなのだろうか。また、行為概念に限ってみても、問題は残されている。具体的に言えば、前節では生きられた意識と反省的意識それぞれに対応する行為のあり方を提示したが、これだけでは意識と行為の類型論の域を出ていない。この2つの意識のあいだには、どのような関係があるのだろうか。本節では、こうした問いをメルロ＝ポンティの心身関係論を参

照して考えていくことにしたい。

まず、メルロ＝ポンティの心身関係論を概観しておこう。心と身体の分離・結合を問うこの哲学史上の難問に対して、メルロ＝ポンティは「いわゆる心身相互作用とは、弁証法の交替ないし置換ということに帰着する」(SC218=302)と主張する。より具体的には、以下の指摘がなされることになる。

「しかし、この二元性は実体の二元性ではない、言い換えれば、心と身体概念は相対化されなくてはならない。つまり、交互に作用し合う化学的構成要素の塊としての身体が存在するし、生物と生物学的環境との弁証法としての身体があるし、社会的主体と集団との弁証法としての身体があるのであり、さらには、我々の習慣でさえも、すべて各瞬間の私に感知されるとは限らない身体なのである。これら諸段階の1つ1つは、前段階のものに対しては〈心〉であり、次の段階のものに対しては〈身体〉である。身体一般とは、すでに辿られた道程の全体、すでに形成された能力の全体、つねにより高級な形態化の行われるべき既得の弁証法的地盤であり、そして心とは、そのとき確立される意味のことである。」(SC227=311-312)

化学的構成要素／生物と生物的環境の弁証法／社会的主体と集団との弁証法、この3つは、メルロ＝ポンティが言う物質／生命／人間（精神）という意味の3つの秩序(SC147=203)と対応している。メルロ＝ポンティによれば、この3つの秩序は3つの実体として重ね上げられるべきものではなく、「先行秩序の捉え直し、および『新しい構造化』として理解されるべき」(SC199=274)ものなのである。さらに、彼はこの構造化（化）という概念について以下のように指摘する。

「心と身体という2つの関係項が絶対的に区別されるということは、存在することを止めないかぎり、決してありえないことなのであり、したがって、それらの経験的な連関は、物質の断片のなかに〈意味〉を設定し、住まわせ、出現させ、存在させるような根源的作用に基づいている。根源的実在としてのこの構造に立ちかえることによって、我々は心身の区別と統一とを、同時に把握しうるようになる。」(SC226=311 傍点はメルロ＝ポンティ)

メルロ＝ポンティの考えでは、〈身体〉を「弁証法的地盤」として新たな構造が成立するとき、その構造によって「確立される意味」が〈心〉にあたる。まず、新たに成立した構造が先行秩序を地盤にするという点で、〈心〉と〈身体〉は連続したものとして捉えられる。しかし他方、その構造が生み出す〈意味〉は地盤である先行秩序と同一ではありえず、その点で〈心〉と〈身体〉は区別されるべきものでもある。メルロ＝ポンティの言う構造とは、先行秩序とのつながりを保持すると同時に、それとは異なる〈意味〉を生じさせるが故に、結合と分離をその特質として持つことになる。

以上のような構造概念の特質は、行動と行為の関係を理解するうえでも大きな役割を果たしてくれる。行動も行為も人間の営みである以上、両者に一定の連続性があることは否定できない。しかしだからと言って、反射行動と知性的行為を一緒にしてしまうのはおかしい。我々は、メルロ＝ポンティの構造概念によって、両者のこうした結合と分離の両立を理解することができることになる。では、両者の結合・分離を成り立たせる構造とは、具体的に何であろうか。結論を先に言えば、それは、本稿が前節で行為概念を探し出す手がかりとした意識だと言える。意識とは、まず身体から生成してくるものであり、その点で行動とのつながりを保持している。しかし同時に、意識の成立は、行動とは異なる行為の誕生を可能にするも

のとなる。その意味で前節で見た意識とは、行動と行為の結合・分離を両立させる「構造としての意識」(SC3=23)なのである。

次に、生きられた意識と反省的意識、この2つの関係性を考えていこう。再び上記の引用(SC227=311-312)に注意を向けてみると、そこで「社会的主体と集団との弁証法」が〈身体〉として位置付けられていることが分かる。この社会的弁証法は、人間的秩序の一部ではあるが、そのすべてではない。人間的秩序は、この弁証法に対して上位にあるもの、すなわち〈心〉にあたるものを含んでいる。では、それは何であろうか⁽¹²⁾。メルロ＝ポンティは、別の箇所以下のように言う。

「人間は、真の認識に到達し、また〈生物あるいは社会的存在者と、その限られた環境との間の弁証法〉を乗り越え、世界を客観的に認識する純粹主観となることによって、遂には絶対的意識—それにとっては身体、つまり個人の実在は、もはや対象にすぎず、死でさえも意味がなくなる—の現実体となるわけである。」(SC220=303-304)

上記の引用によれば、生物的・社会的弁証法が乗り越えられた後の段階にあって純粹主観が成立することになる。そして、この純粹主観が世界を対象化し客観的に認識するとされているように、それは反省的意識なのである。さらに、この反省的意識が、世界の一部としての自分自身を対象化する際、自己意識（対自的意識）と呼びうるものになる。メルロ＝ポンティは、この自己意識について以下のように指摘する。

「自己意識も、人間に〈権利として〉存在するのではなく、自らの具体的存在の解明によってのみ得られるもの、また人間が当初その間に引き裂かれていたところの〈身体〉と〈心〉という孤立的弁証

法の能動的統合によってのみ確証されるもの、となる。」(SC240＝332)

この反省的意識さらには自己意識としての純粹主観が〈心〉にあたる時、先の箇所(SC227＝311-312)に従えば、それ以前の段階である「社会的主体と集団の弁証法」が〈身体〉となる。では、メルロ＝ポンティにあってこの「社会的主体と集団の弁証法」として具体的にどのようなものが考えられているのだろうか。残念ながら、『行動の構造』のなかにその具体的記述があるとは言い難い。しかし、前節で見たフットボールの例(SC182-183＝250)は、その示唆を与えてくれていると言える。確かに、この例にあってメルロ＝ポンティが第一義的に取り上げているのは、競技者とグラウンドとの関係であった。ただ、そこで「競技者の試みる駆け引き」と言われた時、「環境」のなかにグラウンドのみならず、他の競技者も入ってくるとは言えないだろうか。フットボールにおける競技者間の駆け引きとは、「社会的主体と集団の弁証法」の一例なのである。そして、ここで「環境と行為の弁証法」として捉えられる意識とは、生きられた意識のことであった。

ここまで見てきて、純粹主観／「社会的主体と集団の弁証法」＝反省的意識／生きられた意識、という対応関係が明らかになる時、2つの意識の関係も分かってくる。先程述べたように、メルロ＝ポンティによれば、ある秩序は、先行秩序が捉え直され、新たな構造化が生じた結果であった。このことは、意識にも当てはまる。反省的意識とは、生きられた意識が先行秩序として捉え直され、より高次の弁証法的統合が達成された結果なのである。ただ、本節では、この点よりも以下の2点を指摘しておきたい。1つ目は、個人の反省的意識（自己意識）は、社会的弁証法の過程を通じて形成されるということである。メルロ＝ポンティにあっては、自己意識をもった個人が社会に参入していくのではない、社会のなかから個人の自

己意識が生じてくることになる。2つ目は、弁証法的統合が達成され、反省的意識が確立したからと言って、生きられた意識が消失してしまうわけではないことである。メルロ＝ポンティによれば、「統合化は決して絶対的ではなく、常に挫折する」(SC226＝311)。そのため、意識には、反省によっては回収しきれない部分が常に存在することになる。

4. 構造としての意識

前節において我々は、行動と行為が、「構造としての意識」によって連続したものであると同時に、区別されるべきものでもあることを指摘した。では、メルロ＝ポンティが考える「構造としての意識」とは、具体的にどのようなものなのだろうか。このことを見ておかなければ、前節の指摘は内実のないものになってしまう。同時に、この問いは、メルロ＝ポンティの行為理解に直接的につながるものでもある。メルロ＝ポンティは、第2節の引用箇所(SC188＝258-259)で「行為の目的と手段の分析にとって代わるのは、行為の内在的意味と、その内的構造の分析である」と主張していた。第2節で見たように、メルロ＝ポンティの行為概念にあっても意識は重要な位置付けを与えられていることを考えれば、ここで言われている行為の構造とは、行為者の意識のことだと言える。しかし、だからと言ってメルロ＝ポンティは、意識が行為を発動させるという主知主義的な枠組みをとるわけではない。その理由は、一繰り返しになるが—メルロ＝ポンティにあって意識自体が構造として把握されているからなのである。この意味でも「構造としての意識」とは何かが問われなければならない。

この問いを考えていく前に、まず上記の指摘にある「内在的」とか「内的」といった形容詞—これらは、他の多くの箇所でも使用されている—について確認しておくことにしよう。メルロ＝ポンティは、ある箇所でゲシュタルト概念の特質として以下のように述べている。

「ゲシュタルト (forme) は、我々が定義した意味では、それから切りはなしうる諸部分の特性に比べて、独自の性格を持っている。ここでは各契機は他の契機の全体によって規定され、そしてそれらの他の契機の値はそれぞれ全体の平衡状態に依存するのであって、この平衡状態をあらわす定式こそ『ゲシュタルト (forme)』の内在的性格をなすのである。」(SC101=144)

「内在的」とか「内的」と言った形容詞で指摘されているのは、一言で言えば、1つの全体を構成する諸契機の間相互依存関係—上記の引用の言葉で言えば「定式」—のことである。この相互依存関係によって各契機の値は決められると同時に、諸契機全体として部分の総和には還元されえない「独自の性格」を持った1つの意味を生じさせることになる。上記の指摘にあった「内在的意味」とは、この意味のことを指しているのであり、「内的構造」とは、この意味を生み出す諸要素の相互依存関係からなる構造のことだと言える。

以上のことを確認したうえで、まず、生きられた意識の構造について考えてみよう。メルロ＝ポンティは、ベルクソン批判の箇所では哲学が意識と行為の内的連関を捉え損なってきたという先に見た指摘に続き、以下のよう言う。

「意識が連続的持続であるにせよ、判断の発祥地であるにせよ、どちらにしても、意識というこの純粋活動には、構造も本性も持たされてはいないのである。それに対応して、知覚と行為の特性、つまり現実の認識でありまたその変容である知覚と行為も、意識から排除されてしまうことになる。」(SC177=244)

ベルクソンが想定するような意識概念は、構造を持つことはない。メル

ロ＝ポンティによれば、ベルクソンにとって必要だったのは「意識の参与する行為と認識との構造を記述すること」(SC178=245)なのであった。ここで言う認識と行為とは、上記の引用(SC177=244)に従って敷衍しておけば、主知主義によって意識から排除された、知覚による現実の認識とそれを変容させる行為のことを指している。とりわけ、メルロ＝ポンティにとって、知覚を意識から排除することを認めるわけにはいかない。なぜなら、「意識には、意識自身の歴史と自らが越えてきた弁証法の諸段階が現前している」(SC225=309)と指摘されているように、意識とは、自らの構造によって、それ以前の段階にある知覚とのつながりを保持しているものだからである。メルロ＝ポンティは、ベルクソンを「人間的知覚の内容を人間的行為の構造に関係づけようとは考えていない」(SC178=245)として批判する。メルロ＝ポンティの考えでは「知覚とは、具体的主体の生きた弁証法の一契機であり、その主体の全体的構造に参与している」(SC179=246)ものなのである。

では、ベルクソンが捉えそこなった「行為と認識の構造」、すなわち知覚と行為の関係とは、どのようなものを考えればいいのだろうか。これについては、その具体的記述をフットボールの事例(SC182-183=250)のなかに見い出すことができる。競技者は、種々のラインや他の競技者の位置に従ってグラウンドを分節化して認識する。この分節化されたグラウンドに支えられて、競技者の行為は発動するが、同時にその行為によって分節のあり方は変容させられもする。認識（知覚）と行為は、このような相互規定の関係にあり、両者は1つの系を形成している。競技者とグラウンドを結び付け一体のものとする—先に指摘した—実践的志向とはこの系のことなのである。そして、生きられた意識の構造とは、この相互規定関係のことであり、この系のあり方のことを言う。また、この系によって規定される意識はこれを構成する行為から独立した存在ではありえず、さらに意識自体が系の変容のなかでその1つの契機になっていく。メルロ＝ポン

ティが言う意識と行為の[・]内的[・]連関とは、以上のような1つの系のなかで理解されるべき両者の関係のことなのである。

ただ、メルロ＝ポンティにあって、生きられた意識とその構造とは、以上で見たフットボールの事例のような「この瞬間」に成り立つものばかりではない。以下の指摘を見れば分かるように、それらは別のヴァリエーションを持つものとしても捉えられている⁽¹³⁾。

「私は他者の行為の意味 (signification) を通して彼と交通するのであるが、その際大事なことは、彼の行為の構造に到達しなければならないということ、つまり彼の言葉、さらには彼の行為の底を突き破って、そうしたものが整えられる領域に到達しなければならないということである。すでに見たように、他者の行動は或る考え方を意味するよりも前に、ある実存の仕方を表している。そして対話のばあいのように、その行動が私に差し向けられて私の思考を捉え、私がそれに応答する際には—あるいはもっと単純な場合をとれば、私の眼ざしのもとに現れた『文化物』が、ただちに私の能力に順応し、私の注意を喚起し、私によって『了解』される際には—私はある共存のなかに、つまり私だけで構成するのではなく、またちょうど知覚的経験が物理的自然の経験を基礎づけるように、社会的自然という現象の基礎となるような共存のなかに、引き込まれているのである。意識は、何の反省もなしに、現実中存在するもののなかで生き、まだその表現である意味に変じていない具体的構造に、身を委ねることができる。意識の生のさまざまなエピソードは、自由に利用できるような記憶とか、無害な対象とかの地位に引き下げられる以前に、その固有の惰性によって意識の自由を拘束し、世界についての知覚を狭め、行動に常同性を課することができるが、それと同様に、我々は自分の階級や環境を考える以前に、すでにその階級

やその環境なのである。」(SC239=330)

上記の引用にある「そうしたものが整えられる領域」とか「社会的自然という現象の基礎となるような共存」といった言葉に注目してみたい。これらは、メルロ＝ポンティが『行動の構造』以後、本格的に取り組むことになるフッサール現象学にあつて生活世界として提示されるものを示してはいないだろうか。行為者の生きられた意識は、この生活世界の具体的構造に身を委ねている。その意味で生活世界の構造とは、「行為の構造」としての役割を担うものとも言える。例えば、第2節の引用箇所(SC188=258-259)で指摘されていた、自らを装飾し、羞恥を感じ、自分の家に価値を付与するといった行為は、純粹に個人的なものではありえず、そこには生活世界の構造が反映されてくることになる。我々は、そうした行為において「すでにその階級やその環境なのである」。

次に、反省的意識はどのような構造を持つのだろうか。この反省的意識に関するメルロ＝ポンティの記述はあまり多くない。そのため、ここでは第2節の引用箇所(SC190=261-262)にもう一度目を向けてみることにしたい。反省的意識にとって重要なのは、「可能的なもの、間接的なものに対して向きを定める能力」であることは前述した通りである。ただ、メルロ＝ポンティはそれに続けて、その能力がゴールトシュタインの言う「範疇的態度」と同じものだと指摘する。この態度については、別の箇所以下のような説明がなされている。

「何らかの程度でどこにおいても問題になるのは基本的機能の欠陥であつて、それをゲルプとゴールトシュタインは『範疇的態度』と呼び、ヘッドは『象徴的表現』の能力、ウェルコムは『陳述の機能』と呼んでいる。患者の行動は正常者の行動よりも、はるかに密接に環境の具体的・直接的諸関係に密着しているわけであるから、

基本的障害はまた『ある過程に本質的なものの把握不能』と定義され、最後には、知覚され・理解され・演じられた全体を、『図』という形で、無記的に見える『地』のうえに鮮明に浮かび上がらすことの不能と定義されうるであろう。病的変化は、より未分化でより非組織的な、より全体的でより無定形な行動にむかう方向に起こるのである。」(SC69-70=106)

上記の引用は、失語症などの障害について述べたものだが、今重要なのはそこではない。注目すべきは、範疇的態度とは、図と地の関係を浮かび上がらせる能力だとされていることである。これは、反省的意識の特徴をも言い当てているのではないだろうか。つまり、反省的意識は、「可能的なもの」を図として、それを地との関係から浮かび上がらせることができるのである。そして、我々はそれによって「環境の具体的・直接的関係に密着」することをやめ、環境から距離を取ることが可能になる。反省的意識の構造とは、この図と地の関係のことだと言える。では、ここで言う地とは具体的に何のことを指すのだろうか。先に見た指摘(SC225=309)に従えば、反省的意識においても、自らの構造によってそれ以前の段階とのつながりは保持されることになる。具体的に言えば、反省的意識は「可能的なもの」を図として持つのだが、それは、それ以前の生きられた意識(社会的弁証法)という地に支えられているのである。我々は、「可能的なもの」として様々な空想や理念を持つことができる、しかしそれらは、社会を陰画として成り立つものであることを忘れるべきではない。

また、上述したように反省が自己自身に向けられるとき、反省的意識は自己意識となる。メルロ＝ポンティは、自己意識とは「自己に所属しようとする決意によって」(SC239=330)、さらには「〈身体〉と〈心〉という孤立的弁証法の能動的統合によって」成立すると主張する。自己が自己を問い直すという自己意識にとって、こうした能動性は不可欠のものかもし

れない⁽¹⁴⁾。ただ同時に、メルロ＝ポンティは、自己意識とは「自らの具体的存在の解明によってのみ得られるもの」だとも主張する。我々が自己を知ろうとすれば、「具体的存在」としての社会的自己を—さらには生物学的自己をも—知らねばならない。その意味で問い直されるべき自己とは、先に見た地の部分としての自己ではないだろうか。前節で見たように、我々の反省的意識は社会的過程を通して形成される。そして、我々は、これによって社会から距離を取ることができる。しかし、反省が自らに向けられる時、我々は、社会的存在であることに気付くことになる。

5. 行為の意味

前節で我々は、メルロ＝ポンティの分析対象の1つである行為の構造を把握することに努めてきた。行為の構造とは、行為者の意識の構造のことであった。本節では、もう1つの分析対象である、この構造から生じる行為の意味—より正確に言えば、行為者の意識の意味—について考えていきたい。

まず、意味というものに対するメルロ＝ポンティの基本的スタンスを確認することから始めよう。彼の議論に限らず周知のことかも知れないが、意味とは対象それ自体に備わっているものではない。それは、あくまでも対象とそれを観察する者とのあいだで生じるもののなのである。メルロ＝ポンティは『行動の構造』の冒頭で以下のように言う。

「我々の目的は、〈意識〉と〈自然〉—有機的、心理的、さらには社会的な自然—との関係を理解することである。ここで自然とは、たがいに外的で、因果の諸関係によって結ばれた多様な出来事を意味する。」(SC1=21)

メルロ＝ポンティは、自然科学が対象とする自然であれ、社会科学が対

象とする社会(的自然)であれ、意識との関係において理解されるべきものだと考える。(もっとも、次節で少し触れるように、メルロ＝ポンティは意識による認知主義的把握を最終的に採用せず、代わりに知覚による理解を持ち出すのだが。)例えば、メルロ＝ポンティは「生物学の対象は、意味的諸統一体なしでは考えられないものだ」(SC175=240)と主張する。しかし、それは生氣論に戻ることはない。重要なのは、意味的諸統一体があくまでも「意識によつてのみその対象のうちに発見され」(SC175=240)たものであることを押さえておくことである。以上のことを念頭に置くとき、ケースとして次の2つが考えられる。

1つ目は、行為者と観察者が同一のケースである。しかし、これは社会理論にあつて主要なテーマだとは言い難い⁽¹⁵⁾。メルロ＝ポンティ自身は、自らの意識の意味を理解する作業を「内省」(SC197=272)と呼んでいる。しかし、それはあくまでも「可能的パースペクティヴの1つ」なのであつて、「それを否定すべき理由もなければ、それを心的事実へ接近する特権的手段とすべき理由もない」(SC198=273)とされる。

2つ目は、行為者と観察者が異なるケースである。社会理論にあつて通常考えられているのは、他者の行為を観察することであり、その意味でこちらの方がより重要だと言える。メルロ＝ポンティは、他者の意識の意味をどのように把握しようとしているのだろうか。まず、以下の指摘を見ておこう。

「すでに述べたように、心理作用は、行動の構造に帰着する。この構造は、内側から行為者に〈見えるもの〉であると同時に、外からも観察者に見えるものである以上、私は原則上、私自身に近づきうるのと同様に、他者にも近づきうるのであり、そして他者も私も、とも非人格的意識の前にくりひろげられる対象である。しかし私は、自己自身について欺かれ、自分の行為(conduite)の外見的な

いし観念的意味しか把握しないということがありうるように、他者についても欺かれ、彼の行動の外面しか認識しないということもありうる。私が彼と密接に結びつき、2人の感情が合わさって1つの『ゲシュタルト (forme)』を構成し、そして2人の生が別々に展開されることを止めるのでもないかぎり、私が他者について持つ知覚は、たとえば苦痛とか悲嘆などのばあい、彼が自分自身について持つ知覚の等価物には決してならない。私は、かかる稀で困難な一致によってしか、彼と真に一体にはなりえないのであって、それは私が、自己に所属しようとする決意によってしか、自分の自然な運動を把握したり、自己を真剣に認識したりしえないのと同様なのである。したがって私は、自分の特有な位置の故に自己自身を認識するわけではないが、また他者を真に認識すべき生得的能力を持っているわけでもない。」(SC238-239=329-330)

注意すべきは、メルロ＝ポンティが目指すのは、行為者の意識の意味であって、意識それ自体ではないことである。行為者の意識それ自体は、分らない。例えば、彼は「他者が、考えている私の厳密な等価物として私に与えられることは決してない」(SC137=190)と主張している。我々は、他者を理解したと思っていても「欺かれ、彼の行動の外面しか認識しない」ことが、しばしばある。行為者の意識とは、観察者の「意識の前にある対象」(SC199=274)として存在するものであり、そこで観察者が捉えるのは、あくまでも行為者の意識の意味なのである⁽¹⁶⁾。問題は、これをどのように把握するかであるが、言うまでもなく我々の目に見えるのは、行為者の行為だけであり、それを手がかりとするほかない。メルロ＝ポンティも以下のように言う。

「我々が行動の構造を記述したのは、その際、行動の構造が物理的

刺激と筋肉の収縮との弁証法には還元されえず、その意味で行動は、即自的に存在する物であるどころか、それを考察する意識にとってのみ意味をもつ全体だということを示すためであった。しかし、また同時に、『表現の動作 (conduite)』は、逆に、我々の肉眼に見える〈意識の光景〉、つまり〈世界にやうて来た精神〉の光景なのだ、ということを示すためでもあったのである。」(SC225=310 傍点はメルロ＝ポンティ)

観察者は、行為から行為者の意識の意味を理解していくことになる。ここで、意識は構造を持つという前節で見た議論を思い出しておこう。メルロ＝ポンティにあって意識とは、第2節の引用箇所(SC187=258)で「意味的志向の束」(傍点は引用者)とされていたように、何々についての意識として存在する。例えば、フットボールの事例で言えば、意識とはグラウンドについての意識であった。また、反省的意識で言えば、それは「可能的なるもの」についての意識であった。行為者は、自らの行為においてこうした志向対象と関係を取り結ぶことになる。そして、この関係こそが意識の持つ構造なのであった。上記の引用(SC238-239=329-330)で指摘されている「外から観察者に見える」構造とは、この意識の構造のことを指しており、観察者はこれによって行為者の意識の意味を理解する。

しかしながら、志向対象が「可能的なるもの」の場合、それを観察者は外から見ることはできない。このことをどう考えるべきだろうか。確かに、観察者がそれを予測することはできるが、やはり具体的に目に見えるものとの違いは無視できないように思われる。「可能的なもの」は、それが現実化された後でなければ見ることはできない。我々の目に見えるのは、それを現実化しようとする行為者の行為だけなのである。メルロ＝ポンティは、行動の象徴的形態を説明する箇所で以下のように指摘する。

「〈意味するもの〉と〈意味されるもの〉、〈志向〉と〈その目指すもの〉との充全な合致へ向かう行為 (conduite) は、象徴的形態とともに現われる。ここでは行動はもはや単に 1 つの意味をもつのではなく、行動そのものが意味 (signification) なのである。」(SC 133=184 傍点はメルロ＝ポンティ)

メルロ＝ポンティにとって「可能的なもの」の意味とは、それを現実化しようとする行為それ自体の意味として観察可能になる。しかし、行為それ自体の意味と言っても、それはあくまでも、その行為が位置付けられる文脈を地として観察されるものでなければならない。メルロ＝ポンティにあって、この地としてはたらくのが、先に見た生活世界なのである。もう一度、前節の引用箇所 (SC239-330) に目を向けてみよう。ただ、前節とは異なり、ここでは観察者にとっての生活世界が問題となってくる。メルロ＝ポンティによれば、観察者は「他者の行為の意味を通して彼と交通する」とき、この生活世界の構造に到達しなければならない。生活世界の構造とは、行為者の言葉や行為を整えると同時に、それらに対する観察者の理解をも整えることになる。メルロ＝ポンティ自身は、以下のように構造概念と理解可能性を結び付けている。

「われわれの出発点となった『ゲシュタルト (Gestalt)』というもののなかで深い意味をもっているのは、意味という観念よりも、むしろ構造という観念である、つまり理念と存在の見分け難い合体、素材が我々の面前で意味を持ち始めるような素材の偶発的な配列、生れ出でようとしている理解可能性なのである。」(SC223=307)

行為者の行為は、それ自体が生活世界の構造のなかにあることによって意味付けられることになる。これは、上述した「可能的なもの」を現実化

しようとする行為にも当てはまることであり、観察者は、生活世界を地としてこの行為の意味を理解することができる。前節で見たように、行為者自身にとって反省的意識とは、社会を地として「可能的なもの」という図を浮かび上がらせる構造を持つものであった。メルロ＝ポンティによれば、行為者も観察者も、素材の違いこそあれ1つの構造を目指すものだという(SC198=273)。つまり、観察者もまた、生活世界という社会を地として「可能的なもの」の意味を—行為それ自体の意味として—浮かび上がらせていくのである。

6. おわりに

以上の議論をまとめておこう。まず第1節では、メルロ＝ポンティの行動概念を反射行動と学習行動に分けて概観した。彼の考えでは、どちらの行動も独自の構造によって規定されるものであった。次に第2節では、意識を生きられた意識と反省的意識の2つに分け、それぞれに対応する行為類型を提示した。そして、この2つの行為類型が、第1節で見た行動の各段階のどこに入るかを検討した。第3節では、メルロ＝ポンティの構造概念を手がかりに、行動と行為のあいだの結合・分離の関係を指摘した。また、彼の心身関係論をもとに、2つの意識各々の特徴と両者の関係について見ておいた。第4節では、構造としての意識の具体的内容を考察した。生きられた意識および反省的意識は、構造としてそれ以前レベルにあるものを含み込むかたちで成り立つものであった。第5節では、メルロ＝ポンティが考える、行為の意味とその把握の仕方を検討した。メルロ＝ポンティにとって把握の対象は、行為者の意識の意味であると同時に、行為それ自体の意味でもあった。

では、以上のメルロ＝ポンティの行為概念をふまえて、今後我々は、社会理論としていかなる課題に取り組むべきだろうか。ここでは、そのなかでも以下の3つを指摘して本稿を閉じることにしたい。

1 つ目は、既存の行為理論との比較・検討である。例えば、行為理論の 1 つの傾向として、目的意識的行為を重視しすぎたことへの反省から、習慣的行為や感情的行為への注目が指摘できる。しかしその際、意識概念はどれほど検討の対象になっているだろうか。現実の習慣的あるいは感情的行為において、意識がまったく関与しないとは考えにくい。そうであるならば、必要なのは、意識概念を放棄することではなく、それを改訂することなのではないだろうか。この改訂作業において、本稿で見た意識を構造として捉えるというメルロ＝ポンティの議論は、1 つの参照先になりうるものだと言える。

2 つ目は、意味理解の問題である。以下の引用にあるように、メルロ＝ポンティにあって意味とは、第一義的には意識に対してではなく、知覚に対して立ちあらわれる。

「〈それにとって〉ゲシュタルト (Gestalt) が存在するところの意識は、知性的意識ではなく、知覚的経験だったのである。それに問いかけ、そのなかに決定的解明を求めるべきものは、まさに知覚的経験であろう。」(SC227=312 傍点はメルロ＝ポンティ)

問題は、この知覚的経験をどうやって把握するかである。ウェーバー的な構成作業によってだろうか。それでは、「知的意識へと反省的に移行する」(SC240=332) だけになる。メルロ＝ポンティは「知覚的意識をその独自の在り方を損なわずに理解することはできるであろうか」(SC241=333) と問いかけるが、『行動の構造』でその答えが提示されているとはいえない。おそらく、この問いは『知覚の現象学』へ持ち越されているのだと言える。

3 つ目は、行為理論をマクロな歴史社会論に接続していく作業である。本稿では、生活世界のなかの行為といったミクロなレベルに留まり、この

作業を行うことはできなかった。これを行うためには、単に行為の意味と
いうのではなく、複数の行為の連結としての行為連関の意味⁽¹⁷⁾が問われな
ければならないと言える。この問題もまた、『行動の構造』では解決でき
ず、『弁証法の冒険』など他のテキストを参照する必要がある。

このように、残された問題は多くかつ困難だが、今後も一步一步メルロ
＝ポンティを社会理論として読む作業を進めていくことにしたい。

注釈

- (1) 例えば鎌田勇(1991)は、フッサール以後の潮流としてガダマー、ヴィトゲンシュタイン、メルロ＝ポンティらの名前を挙げ、彼らが「行為」という点で交差していると指摘すると同時に、そこに現象学的社会学の展望を見出そうとする(鎌田 1991:290)。本稿で取り上げるメルロ＝ポンティについて言えば、行為と知覚の循環関係が指摘されることになる(鎌田 1991:282)。ただ、鎌田はメルロ＝ポンティを論じるにあたって行動と行為に明確な区別を設けていない。その理由の1つとして、意識概念が入り込んでくることを避けようとしたことが考えられる。しかしそのために、行為の能動性・創造性が問題となる時、メルロ＝ポンティの行為理解の不十分さが指摘され、代わりにサルトルが持ち出されている(鎌田 1991:282)。本稿では、鎌田がさらにはメルロ＝ポンティ自身も一行っていない行動と行為の区別の問題を『行動の構造』のなかで考えていくと同時に、メルロ＝ポンティの意識概念の検討も企図している。
- (2) 邦訳では、comportement を行動、action, acte さらには conduite を行為と訳し分けている。ただ、action と conduite は動作と訳されている箇所もある。
- (3) 神経系全体が問題になるからと言って、全てが全てに依存するといったことが考えられているわけではない。メルロ＝ポンティは観察において「神経活動を部分的まともに小分けし、相互影響を無視しうる別々の過程に区切る」(SC45=76)ことを認めている。こうした作業から、例えば、体温の変化が目まばたき反射にほとんど影響を与えないと指摘することができる(SC54=87)。メルロ＝ポンティが考える神経活動の統一性(全体性)とは、「相互限定の統一性」(SC54=87)なのである。以上のような神経活動の部分限定の問題は、最終的に中枢領域での垂直的局在と抹消領域での水平的局在

として提示されることになる (SC80=119).

- (4) メルロ＝ポンティは「機能こそが有機体を理解させるものだ」(SC38=67)と指摘する。そして、彼は解剖学的構造に対する機能の優位性を示すものとして、代償行為に関するトレンブルク実験を取り上げている (SC40=70).
- (5) この構造あるいはゲシュタルトという概念によって、有機体の正常行動のみならず異常行動も説明されることになる。例えば、有機体はある部分に損傷を受けることで異常行動をとることになる。しかし、これを損傷により行動の構造の一部が欠落したためと解すべきではない。メルロ＝ポンティによれば、異常行動とは損傷によって正常時の構造が質的に変容し、別の構造が成立してしまうが故に生じるものなのである (SC70=107).
- (6) 条件反射学説としては、パブロフのイヌの実験が有名である。しかし、メルロ＝ポンティはこの実験を評価しない。彼によれば、特定の条件刺激に特定の反応を示すパブロフのイヌは、実験室のなかでの病的症例なのである (SC134=185)。メルロ＝ポンティは、以上のような条件反射の事例が行動の説明原理になるとは考えず (SC135=186)、代わりに以下で見る学習行動を持ち出すことになる。
- (7) メルロ＝ポンティはこの一般的特性を以下のように説明する (SC29-30, 41=56-57, 71)。ある文字を書くことを学習した子供は、それを指の筋肉を使って紙の上に書くことができる、と同時に-まったく練習することなく-腕全体の筋肉を使って黒板に書くこともできる。しかも、両者の筆跡はとても似たものになる。メルロ＝ポンティの考えでは、ある文字を学習するとは、それどう書くか（大／小、指／腕、紙／黒板）を学ぶことではなく、その字を書くことそれ自体（書くこと一般）を学ぶことなのである。
- (8) これは、行為において目的と手段がなくなるということを意味しているわけではない。メルロ＝ポンティにあつては-具体的な記述があるわけではないが-おそらく、目的と手段は実践的志向のなかの契機として理解されているのではないだろうか。その契機は他の諸契機との関係において規定されており、行為の進展につれて、この関係に従って各契機は変化していくことになる。具体的に言えば、我々が行為を積み重ねていくと、実践的志向のなかで目的であったものが絶えず手段へと変化していくのである。両者を区別できないという彼の指摘も、このことを指しているのではないだろうか。
- (9) メルロ＝ポンティは言語に以下のような両義的性格を与えている。「言語は、思考から見れば、それが事物と思考の間に位置している限り、隷属の原理であるが、それはまた、偏見に名前を与えて、我々を偏見から免れさせるものである限りは、自由の原理でもある。」(SC180=260)

- (10) メルロ＝ポンティは、ある箇所以下のように指摘する。

「そこで次に、目標と準備的動作 (actions) とのあいだにできあがるこの関係、つまり、その動作によって結合される多様な要素的運動に 1 つの意味を与え、それらを言葉の本来の意味での 1 つの行為 (acte)、—その時から行動の歴史が質的に変えられてしまうような未知の創造—たらしめる関係とはいかなるものかを、考えてみなくてはならない。」(SC105=151)

以上の指摘は、動物の学習行動を指示したものである。この指示に従い、動物の学習行動を「1 つの行為」とみなすことは、確かに②可換的形態と人間の行為（生きられた意識の水準）を同じ段階にあるとする以下で見る本稿の整理とも符合する。しかしながら、上記の指摘が行動と行為の社会理論上の区別を示すものだと考えるべきではない。メルロ＝ポンティにとって「行動の歴史が質的に変えられてしまう」のは、意識が登場する段階においてではない。それよりも前の段階、人間を含めた有機体の世界に対する実存 (exister) の仕方 (SC136=189) が問われる段階においてなのである。別の言い方をすれば、それは、状況-反応が有機体にとっての継起になる段階だと言える。行動・行為における決定的な切れ目を、社会理論は意識の登場に求めるのに対し、メルロ＝ポンティはそれ以前の段階に求めている。両者のこの違いは、銘記しておかなければならない。

- (11) 象徴的形態／反省的意識（本来の人間の意識）についての記述は、可換的形態／生きられた意識に比べて極端なまでに少ない。これは、メルロ＝ポンティの関心の偏りを示すものだと言えるが、この偏りが鎌田の言う不十分さにつながることを考えると、メルロ＝ポンティの議論の仕方自体に問題があったと指摘せざるを得ない。
- (12) 上記の引用 (SC227=311-312) を素直に読めば、それは「習慣」だと言える。しかし、以下の指摘 (SC220=303-304) に習慣という言葉は見出し得ない。また、化学的構成要素／生物と生物的環境の弁証法／社会的主体と集団との弁証法、の各領域と比べたとき、習慣がそれらと同等の守備範囲を持つとは言い難い。この習慣の位置付けについては、注釈 (13) を参照。
- (13) メルロ＝ポンティは生きられた意識について、フットボールの駆け引きに見られる瞬間的意識から、生活世界における持続性を持ったものまで、いくつかのヴァリエーションを想定していると言える。彼は、これについて『行動の構造』で詳しく論じているわけではない。ただ、この生きられた意識が、瞬間的なものから持続的なものへと移行していく過程は、—中期以降のメルロ＝ポンティが好んで使う—沈澱という言葉で説明できるかもしれない。例えば、前節の引用箇所 (SC227=311-312) にあって、「社会的主体と集団の

弁証法」—本稿ではこの具体例をフットボールの駆け引きに見た—の次に「習慣」が位置付けられていた。さらに、メルロ＝ポンティはこの箇所・に注釈を付け「つねに、すでにそこにあり、意識にとってすでに構成されているような『自然的身体』と、その自発的行為の沈澱したものである『文化的身体』との区別を押し進める必要」(SC227=314)があると指摘することになる。

- (14) こうした能動性が、どういうものであり、何に由来するものなのかを、メルロ＝ポンティは『行動の構造』のなかのどこにも説明していない。また、メルロ＝ポンティ自身によっても「意識が、次々に引き受けるさまざまな構造を貫いて、自己自身を再認するのはどうしてか」(SC186=257)という問題提起が、自らの議論に対してなされている。
- (15) もちろん、観察者の立場性が問われる場合など、こちらのケースが問題になる時があることを忘れるべきではない。
- (16) 本節の冒頭の引用(SC1=21)で、心理的自然が取り上げられているのもここから理解できる。また、メルロ＝ポンティは心理学について以下の指摘している。
「少なくとも心理学が『心的出来事』の盲目的表記であることを止めて、その意味の記述となるかぎり、心理学的分析の課題と超越論的分析の課題とは、異ならないわけである。」(SC180=251 傍点は引用者)
- (17) 厚東(1975)によれば、ウェーバーの理解社会学は、この行為連関の意味を含んでいたが故にマクロな歴史・社会分析になりえたという。

※引用については、基本的に邦訳に拠ったが、訳語・訳文を一部改めた。また、邦訳には原著にはない〈 〉が使用されているが、筆者の判断で採用した箇所としなかった箇所がある。

参 照 文 献

- SC: Merleau-Ponty, M, 1942, *La Structure du Comportement*, Paris, PUF (= 滝浦静雄・木田元訳『行動の構造』1964年、みすず書房)
- 鎌田勇, 1991「意味と行為 シュッツとメルロ＝ポンティを手掛りに」西原和久編著『現象学的社会学の展開』pp. 253-295
- 厚東洋輔, 1975「ヴェーバーと意味の社会学」『現代思想』2月号, pp. 158-166